

工科系大学生の性格に関する研究

〔第二報〕

鎌 田 英 爾

A Study of the Personality about the Students
of KOGAKUIN University

Eiji Kamata

〔Ⅰ〕 はじめに

工科系大学の新入生を中心に、Y-G 性格検査やクラブ活動の調査にもとづいて研究をすすめてきた中で、前回¹⁾は保健体育理論の再履習受講者（2年以上）に関して、学年別やクラブ活動の経験別に検討を加えたが、今回は、三つの年度別グループ及び学系別の特徴や傾向について分析を試みたものである。

〔Ⅱ〕 調査方法・内容

- 1) 対 象 工学院大学・保健体育理論の再履習受講者（男子）
- 2) 調査期間 昭和52年～63年（除57年）
- 3) 調査人数 512名

第一表 調 査 人 数

	A	B	C	計
機 械 系	50	66	79	195
化 学 系	28	50	37	115
電 気 系	11	52	35	98
建 築 系	47	32	25	104
計	136	200	176	512

4) 調査内容

- a) Yatabe-Guilford Character Test²⁾（以下 Y-G と略す）

- b) 中学・高校・大学時代におけるクラブ活動の状況
- 5) 年度別グルーピング
- a) 52年～55年……………Aグループ
- b) 56年～59年 (除57年) ……Bグループ
- c) 60年～63年……………Cグループ
- 6) クラブ経験のグルーピング¹⁾
- (工学院大学研究論叢第27号, p. 127 参照)

〔Ⅲ〕 結果の処理

1) Y-G Character Test

120項目の質問に対する解答を, 12の尺度に分類して粗点 (0～20) を計算し, プロフィールや類型などを数量的に判定し統計的に処理できる²⁾³⁾。

2) Y-C 検査プロフィールの五典型⁴⁾

第 二 表

類型	名 称	因 子		
		情緒安定性 E(DCIN)	社会適応性 A(O Co Ag)	積極性(向性) V(GRTAS)
A 型	平均型 (Average Type)	平 均	平 均	平 均
B 型	右寄り型 (Black List Type)	不 安 定	不 適 応	積極(外向)
C 型	左寄り型 (Calm Type)	安 定	適 応	消極(内向)
D 型	右下り型 (Director Type)	安 定	適応又は平均	積極(外向)
E 型	左下り型 (Eccentric Type)	不 安 定	不適応又は平均	消極(内向)

3) E. A. V. 3 領域における l. c. r. の出現率

12の尺度を3因子群に分類して夫々を E. A. V. とし, 更に各領域を5段階評価の3点 (38.3%) を中心としてc型, 左寄り (1点, 6.7%, 2点24.2%, 計30.9%) をl型, 右寄り (4点, 5点30.9%) をr型とすることによって, 27のパターンに分けることができる。これをY-Gの五類型の典型に当てはめると, A型はccc型, B型はrrr型, C型はlll型, D型はllr又はlcr型, E型はrll又はrc l型と対応させることができる。

しかし上記の五類型 (ABCDE) に分類していくと, 夫々の典型の出現率は必ずしも多くはなく, 40種以上ものパターンに分散している為に, そこから個々の性格像を判定することは困難なものとなる。

又 E. A. V. 3 領域のうち、どの領域にあっても c の範囲については、平均型又は平凡型と呼ばれているように、その特徴についてはかなりあいまいであるといえる。

そこで先の27のパターンのうちから c 型を除いて、l と r のみの組合わせにより12のパターンを考えることができる。更にこの12のパターンを l, c, r, の組合わせと性格の傾向から、I, II, III, の3群に分類した（12のパターンと3群については重複するものがあるので、100%を越すこともある）。

第三表 E. A. V. 3 領域によるパターン⁵⁾

群	パターン	E 領 域	A 領 域	V 領 域
I	ll-	情 緒 安 定	社会的適応	—
	l-r	情 緒 安 定	—	積 極 的
	-lr	—	社会的適応	積 極 的
II	l-l	情 緒 安 定	—	消 極 的
	-ll	—	社会的適応	積 極 的
	lr-	情 緒 安 定	社会的不適応	—
	rl-	情 緒 不 安 定	社会的適応	—
	-rr	—	社会的不適応	消 極 的
	r-r	情 緒 不 安 定	—	積 極 的
III	-rl	—	社会的不適応	消 極 的
	r-l	情 緒 不 安 定	—	消 極 的
	rr-	情 緒 不 安 定	社会的不適応	—

第四表 l, c, r 型分類のための c の範囲¹¹⁾

E				A			V			
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
3	3	3	4	2	3	3	2	3	3	3
2	3	3	3	3	3	4	3	3	3	4
2	3	3	4	2	3	4	2	3	3	4
							2	2	3	4
										4

〔Ⅳ〕 結果と考察 (Ⅰ) Y-G 尺度別

1) 辻岡平均と、2～4 年合計（以下単に「合計」と略す）については、前回（27号）¹⁾においても検討を加えたが、O（やや主観的）、G（非活動的）をのぞく10個の尺度全てについてD型寄り（安定・適応・積極型）の方向に有意差が認められた。しかし1年と「合計」との間では、D（抑うつ性小）がE型寄り（不安定・不適応・消極型）に有意差を示し、C（回帰性大）、O（主観的）もE型寄りではあるが、全体

の傾向としては、B型寄り（不安定・不適応・積極型）を含んだE型寄り（EB型又はB'型）であるといえよう。

2) 学科別比較では、機械系ではN（神経質）、O（主観的）、G（攻撃的）を除いて、D型寄りに有意差があり、化学系ではAg（攻撃的）に差が見られなかった以外は機械系と類似した傾向を示している。更に建築系では、C（気分の変化）で差が見られなかった他は、やはり機械系と類似した傾向にあるといえる。しかし電気系だけは他の3学系とは異なっており、R（のんきさ）でD型寄りを示した他はO（主観的）、G（非活動性）がE型寄りに有意差を示している。その他の尺度についてはややD型寄りの傾向にあるものの有意差はなく、はっきりした傾向はつかめなかった。

3) 年度別グループについては、Aグループでは、N（神経質）、O（客観的）、G（攻撃的）を除く9個の尺度は全てD型寄りに片寄っており、Bグループも同じ傾向にあるといえる。又Cグループも同様の傾向であるといえるが、I（劣等感）については有意差が見られなかった。

4) 本学「合計」と各学系との比較では、電気系をのぞく3学系については大きな差が見られず（建築系のAをのぞく）同じ傾向である反面、電気系では5個の尺度で有意差が認められ、そのうちG（活動的）をのぞけば、他は全てE型寄りという結果になった。

又、はっきりした有意差は見られないものの、建築系だけは、ややB型寄り（B'型又はAB型）の傾向にあるといえる。

5) 本学「合計」と年度別グループの間では、CグループのI尺度（劣等感大）がE型寄りに有意であったが、A、B、C各グループの間には殆んど差が認められなかった。

6) 本学1年と各学系との間では、E型寄りの傾向を示したのは電気系の6尺度（D、O、Co、G、T、S）、建築系の2尺度（D、O）であった他に、D型寄りに有意差を示した尺度は、各学系に1～2尺度認められたにすぎない。しかし有意差はないものの、全体的傾向としては（電気系を除く）ややB型寄り（不安定・不適応・積極型）（B'型又はAB型）を示しているといえる。

しかし電気系だけは11個の尺度がE型寄り（うち5個の尺度に有意差あり）であり、他の3学系とは明らかに異なる傾向を示しているといえよう。

7) 本学1年と各グループとの間では、有意差のある尺度は、夫々1～2尺度にすぎず、はっきりした傾向は見られないが、強いていえばA、BグループはややB型寄り（B'型又はAB型）の傾向を、CグループではI、O、G尺度がE型寄りに有意差

を示しており、E型寄りの中にややB型寄り（EB型又はB'型）の傾向を含んでいるといえよう。

8) Y-G 尺度を、上下各6尺度の差で比較してみると、年度別グループではその差は、わずかではあるが、 $A \rightarrow B \rightarrow C$ の順にE型の方向に傾いていることを示している。又学系別では、本学「合計」に比べて化学系・建築系がよりD型寄りであるが、電気系はかなりはっきりとE型寄りを示している。又機械系は変らない。

本学1年との比較では、Aグループと化学系・建築系がD型寄りであり、辻岡平均に対しては、全てが大きな差をつけてD型寄りを示している。

9) Y-G 尺度を、6項目の因子グループ⁹⁾に分けて比較してみると、年度別グループと本学1年とでは、DCIN因子（情緒不安定性）とAgG因子（活動性）がE型寄りを示し、辻岡平均とでは、CグループのOCOAg因子（社会的適応性）以外は全てD型寄りである。

これを $A \rightarrow C$ の流れで比較してみると、OCOAg因子（社会的適応性）、GR因子（衝動性）、AS因子（服従性）が共にE型寄りに、RT因子（内省性）と、DCIN因子がD型寄りに流れていることが分かる。しかしその差はわずかである。

因子グループを学系別に見ると、「合計」よりD型に寄っているのは、DCIN因子の化学系、OCOAg因子の機械系・化学系、AgG因子では機械系・建築系、GR因子とRT因子では電気系以外、AS因子では化学系・建築系であり、電気系はどの因子グループにおいてもE型寄りである。

本学1年との比較では電気系と、全ての学系のDCIN因子がE型寄りであった。又辻岡平均とでは、殆んどD型寄りであるが、電気系と建築系のOCOAg因子だけは、E型寄りであった。

〔V〕 結果と考察（2） 五類型別

1) 「合計」と各年度別グループとの比較では、30%以上少いのはAグループのA型、20%代で少いのは、BグループのB、C型、CグループのD、E型であり、反対に20%以上多いのは、AグループのC型、CグループのA型であり、その他は10%代の増減あるいはそれ以下であり差が見られない。

2) 「合計」と学系別の比較では、30%以上少ないのは電気系のB、D型、建築系の亜型、20%代で少ないのは機械系の典型、化学系の準型とC型、建築系のA型であり、反対に30%以上多いのは電気系のC型と建築系のB型、20%代で多いのは、化学系の亜型、電気系のA、E型、建築系の典型であるが、その他は10%以下であり、グ

グループ別と同様あまり差があるとは言えない。

3) 全体にD型の多い所はなく、建築系にB型、電気系にはC型が見られ、反対に少ないのは電気系のB、D型、AグループのA型である。

4) 1年の合計と±30%以上で比較してみると、+30%ではB型にA、Cグループと建築系、-30%ではA型にAグループ、C型にBグループと化学系が見られる。

〔Ⅵ〕 結果と考察 (3) E. A. V. 領域における l, c, r パターンの出現率

1) 三群の出現率は、I 群では電気系 (61.2%) とCグループ (69.3%) が少なく、Ⅲ群では電気系 (53.1%) が多いのが目につく他はあまり差が見られなかった。ここでも電気系だけは他のグループとは、かなり差が見られる結果となった。

2) この傾向はD、E型タイプの出現率で見ても、もっとも差が見られるのは電気系である。

3) 更に l, c, r, パターンの出現率で見ると、いずれも、l-r (情緒安定、積極型) がもっとも多く (182, 35.5%), r l- (情緒不安定、適応型) がもっとも少ない (12, 2.3%)。これを年度別グループで見ると、やはり共通して最大値が l-r 型、最小値が r l- 型である。

4) もっとも要注意なタイプである r r l タイプについてみると、「合計」では6.8%であるのに対し、化学系(14.8%), 電気系(13.3%)が突出していることが見られる。

〔Ⅶ〕 他の研究例との比較

1) 前回と同様に今回も類似している他の研究例について、E. A. V. 領域の出現率を中心に比較検討を行った。

2) 山田⁷⁾⁸⁾、森脇⁹⁾らによる、K大学理工学部学生 (791名) については、本学「合計」はI 群で20%多く、Ⅲ群では7%少ないD型寄りの結果が得られている。

又同じく森脇による報告のうち、本学と対比出来る四学科との比較では、Ⅲ群が約10%少ない他は殆んど差が見られず、前回と同様、同質な集団と推定することができる。

3) 上記について更に詳しく、学科別に対比して比較してみた。

イ) 機械系 (学科) ではI 群が18%多く、Ⅲ群は反対に10%少ない。l l r。

l c r では19%多く見られ、本学の方がいく分D型寄りであるといえる。

ロ) 化学系 (学科) では、Ⅲ群が39%, r r-が22%, l l-が10%と少ない他は、大きな差はなく、結果的に本学の方がD型寄りであった。

- ハ) 電気系（学科）では、Ⅰ群、Ⅲ群共に9%ⅠⅠ-が10%本学の方が少ないが、 $r r l$ が7%多く見られた。
- ニ) 建築系（K大学では土木科）では、Ⅰ群は10%少なく、Ⅲ群が13%、 $r r l \cdot r c l$ が8%多いなど明らかに本学の方がE型寄りであると言える。

〔Ⅷ〕 ま と め

1) Y-G尺度を学系別に見ると、辻岡平均に対しては、総じてD型寄り（安定・適応・積極型）に有意差のある尺度が8～9項目ある中で、電気系だけはE型寄り（不安定・不適応・消極型）に有意差のあるものが2項目あり（O—主観的、G—非活動的）、D型寄りに有意だったのは1項目のみであった。これは上下各6尺度の差、因子グループ別比較においても同様の傾向を見ることができる。

この傾向は、2～4年の「合計」や1年と比較してみると更にはっきり現れているが、O Co Ag 因子では社会的適応の方に傾きを見せており、R（のんきさ）やG（活動性）も、比較するグループによっては有意差を示すところがある。

しかしこれらを含んだ上で、全体として見るならば、辻岡平均よりは、はるかにD型寄りであり、1年合計との比較でも、はっきりE型寄りであるというよりは、B型寄りを含んだE型寄り（EB型あるいはB'型）であるということができよう。

この様な見方をしていくと、「合計」に対する建築系等はややB型寄り（B'型又はAB型）と見ることも出来る。

2) Y-G尺度を年度別グループに見ると、各A、B、Cグループの間には、大きな差を認めることができず、1年合計に対するCグループが、わずかにE型寄りを示しただけであるといえる。

上下6尺度の差では、A→B→Cの順にE型寄り（又はB型寄り）に傾いていることが見られる。BグループをのぞいてAグループとCグループの間を比較してみると、DCIN因子とRT因子がD型寄りに、O Co Ag 因子とGR因子、AS因子はE型寄りに傾いていくことが読みとれる。

3) 五類型別による比較では、電気系にE類が多いこと、D類はA→B→Cの順に減少の傾向にあること、反対にA類は増加傾向にあることが読みとれるが、類型別・典型別ともに50%を越えるものがなく、典型の比率も1/3以下であることなどから、数字によって五類型別を比較検討する意味は少ないのではないかと考えられる。

4) l. c. r. パターンの出現率による比較ではE. A. V. の3領域における27種の

パターンによって、個人個人のプロフィールとして判断する資料としては使用することができ、多数の人間について統計的处理を行う場合には、各領域にcが含まれることで、性格づけがぼけてくるものも出てくる。従ってこのcを除いて12のパターンにまとめることは、性格の傾向が集団として把握でき、理解し易くなるといえよう。更にこれを3群に集約する方法も加えていくことによって、かなりくわしい判定が可能になるのではないかと考える⁷⁾。

又もっとも注意を要する性格としてrrl型が考えられるのでこれも合わせて検討する必要がある。

5) 以上の点をふまえて学系別に検討してみると、ここでも電気系以外の学系の間には大きな差が見られない。但し化学系と電気系のrrl型(情緒不安定・社会的不適応・消極的内向的)の数字がやや高い(14.8%, 13.3%)のが目についた。

6) 森脇⁸⁾によるK大学の報告の中から、本学の学系と似かよった学科を選択して比較してみると、差が少なく全体としてはほぼ同質な集団と見る事ができる。

これを学系(学科)別に対比して比較してみると、K大学のデータは各科50名と調査人員が少ないので、はっきりしたことはいえないものの、機械系と化学系ではやや本学の方がD型寄りといえる。又電気系も同様であるが、K大学のrrlが多いのが目についた。建築系(K大学では土木科)については本学の方がはっきりとE型寄りであった。

7) 前回の調査では、クラブ経験の無いグループ(無所属)と文化部経験グループをのぞけば、2年以上(保健体育理論の再履習者)の学生群は予想以上に良い傾向が見られたが⁹⁾、本学の1年生との比較では全体として大きな差ではないものの、ややE型寄り(やや主観的、非活動的、抑うつ性大)の傾向が読みとれる。

今回の調査では、電気系が他の学科に比較して、かなりはっきりとE型寄りの傾向が見られたが、その原因は不明で、今後もその推移を見守り、検討していきたい。

8) 年度別グループに関しては、3グループの年度が隣接していた為に、調査した結果に殆んど差が見られなかったが、A→Cの傾向としてはやや差が見られたのではないかと考える。これがE型寄りの方向であったことは、近年の若者が勉学や政治、更には日常生活などの面でシラケや無関心の方向にあるといわれることと無縁ではないような気がするの考えすぎであろうか。

今後更に継続的に検討を重ねていく必要を痛感した。

第五表 Y-G尺度一覧

$\left\{ \begin{array}{l} A = S.52 \sim 55 \text{年} \\ B = S.56 \sim 59 \text{年} \\ C = S.60 \sim 63 \text{年} \end{array} \right. \quad \left\{ \begin{array}{l} \text{上段 } \bar{x} \\ \text{下段 } \sigma \end{array} \right.$

	A	B	C	合 計	機械系	化学系	電気系	建築系	辻岡平均	1 年
D	9.57	9.51	9.03	9.46	8.85	9.17	10.73	9.69	11.23	8.59
	5.97	5.80	5.85	5.87	5.58	5.80	5.99	6.09	5.51	5.47
C	8.97	8.95	9.17	9.03	9.08	8.54	9.19	9.32	9.98	8.49
	5.00	4.36	5.04	4.78	4.57	4.64	4.81	5.20	4.99	4.66
I	7.32	7.88	8.72	7.82	7.90	7.32	8.77	7.35	8.97	7.87
	4.92	4.97	5.12	5.04	5.15	5.07	5.38	5.21	5.52	5.07
N	8.88	9.18	9.43	9.18	8.95	8.96	9.73	9.35	9.72	9.04
	5.01	5.32	4.94	5.12	5.79	5.17	4.95	5.50	5.35	5.13
O	8.11	8.17	8.51	8.27	7.68	8.10	9.14	8.75	8.11	7.79
	4.89	4.48	4.31	4.53	4.32	4.51	4.45	4.81	4.38	4.09
Co	7.46	7.56	7.61	7.54	7.58	7.32	8.02	7.29	8.34	7.30
	4.32	4.05	3.89	4.08	4.07	3.98	3.99	4.17	4.06	3.83
Ag	11.58	11.35	11.56	11.48	11.64	11.29	10.98	11.96	10.87	10.61
	4.03	3.88	4.02	3.97	4.02	4.16	3.57	3.92	4.25	3.98
G	11.36	10.77	10.28	10.76	10.93	10.73	9.72	11.53	10.85	11.13
	4.64	4.81	4.43	4.66	4.55	4.71	4.50	4.71	5.16	4.48
R	12.05	11.68	12.18	11.95	12.00	12.03	11.16	12.50	9.96	11.66
	4.43	4.36	4.05	4.28	4.26	5.12	3.99	4.39	4.85	4.33
T	9.94	9.91	10.13	9.99	10.28	10.63	8.94	9.74	8.16	10.13
	4.35	4.66	4.23	4.43	4.40	4.53	4.37	4.22	4.62	4.30
A	10.05	10.19	9.57	9.94	9.55	10.78	8.66	10.94	8.52	9.41
	4.80	4.95	4.80	4.87	4.85	4.92	4.52	4.74	5.53	4.88
S	12.65	12.71	12.40	12.59	12.58	13.32	11.00	13.28	10.23	12.46
	5.30	5.11	5.32	5.23	5.12	5.08	5.34	5.15	5.48	5.00
(N)	136	200	176	512	195	115	98	104	4,136	562

第六表 Y-G尺度の各グループ間検定 上段……尺度差, 下段……t

辻岡平均との比較 (N=4, 136)						2, 3, 4 年合計との比較 (N=512)						1 年合計との比較 (N=562)									
機械系	系学化	電気系	建築系	A	B	C	機械系	化学系	電気系	建築系	A	B	C	機械系	化学系	電気系	建築系	A	B	C	
D	-2.38***	-2.06***	-0.50*	-1.54**	-1.66***	-1.72***	-2.20***	-0.61	-0.29*	1.27 \ominus	0.23	0.11	0.05	-0.43	0.26	0.58	2.14 \ominus	1.10 \ominus	0.98 Δ	0.92 \ominus	0.44
C	-0.90**	-1.44**	-0.79	-0.66*	-1.01**	-1.03**	-0.80*	0.05	-0.49	0.16	0.29	-0.06	-0.08	0.14	0.59	0.05	0.70	0.83	0.48	0.46	0.68
I	-1.07**	-1.65***	-0.20**	-1.62**	-1.65***	-1.09**	-0.25	0.08	-0.50 Δ	0.95 \ominus	-0.47	-0.50	0.06	0.90**	0.03	-0.55	0.90	-0.52	-0.55	0.01 Δ	0.85 \ominus
N	-0.77 Δ	-0.76	0.01	-0.37 Δ	-0.84 Δ	-0.54	-0.29	-0.23	-0.22	0.55	0.17	-0.30	0.00	0.25	-0.09	-0.08	0.69	0.31	-0.16	0.14	0.39
O	-0.43	-0.01*	1.03 \ominus	0.64	0.00	0.06	0.40	-0.59	-0.17 Δ	0.87 \ominus	0.48	-0.16	-0.10	0.24	-0.11	0.31	1.35 \ominus	0.96 \ominus	0.32	0.38 Δ	0.72 \ominus
Co	-0.76**	-1.12**	-0.32*	-1.05*	-0.88**	-0.78*	-0.73*	0.04	-0.22	0.48	-0.25	-0.08	0.02	0.07	0.28	0.02 Δ	0.72 \ominus	0.01	0.16	0.26	0.31
Ag	0.77**	0.42	0.11	1.09**	0.71 Δ	0.48*	0.69	0.16	-0.19	-0.50	0.48	0.10	-0.13	0.08	1.03**	0.68	0.37	1.35**	0.97*	0.74*	0.95**
G	0.08	-0.12*	-1.13	0.68	0.51	-0.08	-0.57 Δ	0.17	-0.03*	-1.04 \ominus	0.77	0.60	0.01	-0.48	-0.20	-0.40	-1.41**	0.40	0.23	-0.36	-0.85 \ominus
R	2.04***	2.07***	1.20**	2.54***	2.09***	1.72***	2.22***	0.05	0.08	-0.79 Δ	0.55	0.10	-0.27	0.23	0.34	0.37	-0.50 Δ	0.84	0.39	0.02	0.52
T	2.12***	2.47 Δ	0.78	1.58***	1.78***	1.75***	1.97***	0.29	0.64	-1.05*	-0.25	-0.05	-0.08	0.14	0.15	0.50*	-1.19 \ominus	-0.39	-0.19	-0.22	0.00
A	1.03**	2.26***	0.14	2.42***	1.53***	1.67***	1.05**	-0.39 Δ	0.84**	-1.28 \ominus	1.00	0.11	0.25	-0.37	0.14	1.37**	-0.75**	1.53	0.64 Δ	0.78	0.16
S	2.35***	3.09***	0.77	3.05***	2.42***	2.48***	2.17***	-0.01	0.73**	-1.59 \ominus	0.69	0.06	0.12	-0.19	0.12 Δ	0.86*	-1.46 \ominus	0.82	0.19	0.25	-0.06
(N)	195	115	98	104	136	200	176	195	115	98	104	136	200	176	195	115	98	104	136	200	176

***……0.1%, **……1%, *……5%, Δ ……10%, \ominus はE型寄りを示す

第七表 五類型の出現率

	2・3・4年 A 合計			2・3・4年 B 合計			2・3・4年 C 合計			合 計			機 械 系			化 学 系			電 気 系			建 築 系		
	頻 数	%	頻 数	頻 数	%	頻 数	%	頻 数	%	頻 数	%	頻 数	%	頻 数	%	頻 数	%	頻 数	%	頻 数	%	頻 数	%	
A	2	1.5	17	10	5.0	45	8	4.5	46	20	3.9	108	6	3.1	41	3	2.6	23	10	10.2	25	1	1.0	19
A'	4	2.9		11	5.5		15	8.5		30	5.9		12	6.2		6	5.2		5	5.1		7	6.7	
A''	11	8.1	12.5	24	12.0	22.5	23	13.1	26.1	58	11.3	21.1	23	11.8	21.0	14	12.2	20.0	10	10.2	25.5	11	10.6	18.3
B	9	6.6	24	6	3.0	29	6	3.4	33	21	4.1	86	8	4.1	31	4	3.5	18	2	2.0	13	7	6.7	24
B'	9	6.6		15	7.5		22	12.5		46	9.0		16	8.2		8	7.0		8	8.2		14	13.5	
AB	6	4.4	17.6	8	4.0	14.5	5	2.8	18.7	19	3.7	16.8	7	3.6	15.9	6	5.2	15.7	3	3.1	13.3	3	2.9	23.1
C	9	6.6	20	6	3.0	19	8	4.5	21	23	4.5	60	6	3.1	22	6	5.2	11	5	5.1	15	6	5.8	12
C'	4	2.9		5	2.5		7	4.0		16	3.1		6	3.1		1	0.9		6	6.1		3	2.9	
AC	7	5.1	14.7	8	4.0	9.5	6	3.4	11.9	21	4.1	11.7	10	5.1	11.3	4	3.5	9.6	4	4.1	15.3	3	2.9	11.5
D	16	11.8	55	26	13.0	77	19	10.8	58	61	11.9	190	18	9.2	76	16	13.9	47	8	8.2	29	19	18.3	38
D'	32	23.5		36	18.0		30	17.4		98	19.1		47	24.1		21	18.3		13	13.3		17	16.3	
AD	7	5.1	40.4	15	7.5	38.5	9	5.1	33.0	31	6.1	37.1	11	5.6	39.0	10	8.7	40.9	8	8.2	29.6	2	1.9	36.5
E	4	2.9	17	12	6.0	30	5	2.8	18	21	4.1	65	6	3.1	22	6	5.2	16	6	6.1	16	3	2.9	11
E'	10	7.4		13	6.5		8	4.5		31	6.1		10	5.1		5	4.3		9	9.2		7	6.7	
AE	3	2.2	12.5	5	2.5	15.0	5	2.8	10.2	13	2.5	12.7	6	3.1	11.3	5	4.3	13.9	1	1.0	16.3	1	1.0	10.6
F	3	2.2	$\frac{3}{2.2}$	0	0	$\frac{0}{0}$	0	0	$\frac{0}{0}$	3	0.6	$\frac{3}{0.6}$	3	1.5	$\frac{3}{1.5}$	0	0	$\frac{0}{0}$	0	0	$\frac{0}{0}$	0	0	$\frac{0}{0}$
(N)	136			200			176			512			195			115			98			104		
標準型	40	29.4		60	30.0		46	26.1		146	28.5		44	22.6		35	30.4		31	31.6		36	34.6	
並型	59	43.4		80	40.0		82	46.6		221	43.2		91	46.7		41	35.7		41	41.8		48	46.2	
歪型	34	25.0		60	30.0		48	27.3		142	27.7		57	29.2		39	33.9		26	26.5		20	19.2	
その他	3	2.2		0	0		0	0		3	0.6		3	1.5		0	0		0	0		0	0	

鎌 田 英 爾

第八表 パターンの出現率

(その1)

		機 械 系		化 学 系		電 気 系		建 築 系	
I 群	l l -	49	168	26	98	18	60	28	80
	l - r	78		45		26		33	
	- l r	41	86.2%	27	85.2%	16	61.2%	19	76.9%
II 群	l - l	11		2		8		5	
	- l l	18	87	4	39	8	39	4	49
	l r -	10		5		3		5	
	r l -	7	%	3	%	1	%	1	%
	- r r	22	44.6	17	33.9	10	39.8	22	47.1
	r - r	19		8		9		12	
III 群	- r l	8	53	10	35	14	52	7	40
	r - l	17		11		18		12	
	r r -	28	27.2%	14	30.4%	20	53.1%	21	38.5%
計		308		172		151		169	
(N)		195		115		98		104	

(その2)

		A		B		C		合 計	
I 群	l l -	34	116	51	168	36	122	121	406
	l - r	53		70		59		182	
	- l r	29	85.3%	47	84.0%	27	69.3%	103	79.4%
II 群	l - l	8		12		6		26	
	- l l	10	75	14	70	10	68	34	213
	l r -	10		5		8		23	
	r l -	5	%	3	%	4	%	12	%
	- r r	27	55.1	21	35.0	22	38.6	70	41.6
	r - r	15		15		18		48	
III 群	- r l	12	52	17	72	10	57	39	181
	r - l	15		27		17		59	
	r r -	25	38.2%	28	36.0%	30	32.4%	83	35.4%
計		243		310		247		800	
(N)		136		200		176		512	

工科系大学生の性格に関する研究 (第二報)

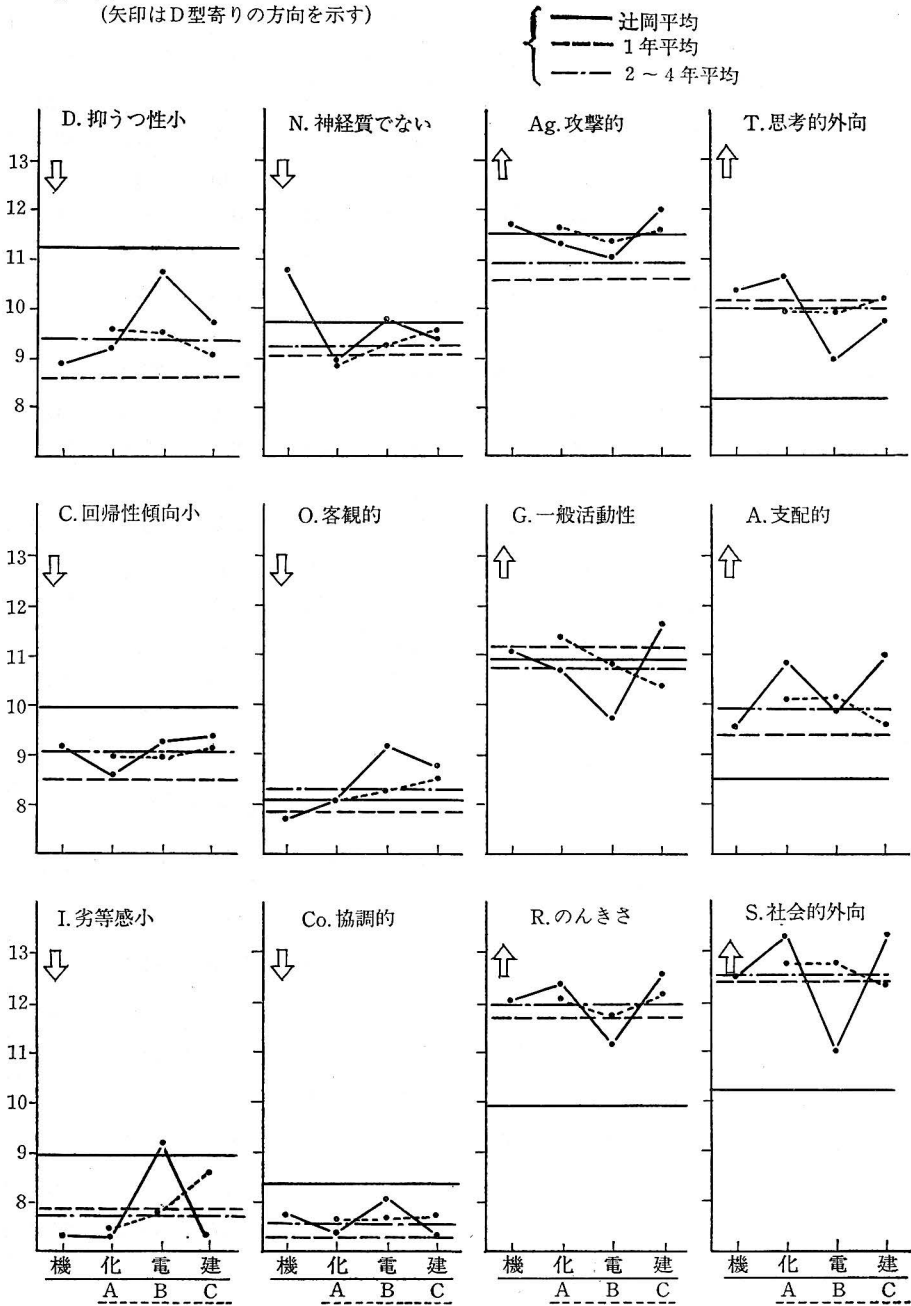
第九表 l, c, r による, D, E 型タイプの出現率

	(N) (%)	D 型 タイプ				E 型 タイプ			
		l l r	l l r l c r	l l -	I 群	r r l	r r l r c l	r r -	Ⅲ群
機 械 系	195	38 19.5	69 35.4	49 25.1	168 86.2	8 4.1	13 6.7	29 14.9	55 28.2
化 学 系	115	22 19.1	41 35.7	25 21.7	96 83.5	7 14.8	10 8.7	14 12.2	36 31.3
電 気 系	98	13 13.3	22 22.4	18 18.4	58 59.2	13 13.3	17 17.3	20 20.4	52 53.1
建 築 系	104	18 17.3	32 30.8	28 26.9	79 76.0	7 6.7	12 11.5	21 20.2	40 38.5
合 計	512	91 17.8	164 32.0	120 23.4	401 78.3	35 6.8	52 10.2	84 16.4	183 35.7
A	136	24 17.6	42 30.9	34 25.0	115 84.6	11 8.1	13 9.6	26 19.1	53 39.0
B	200	40 20.0	69 34.5	51 25.5	166 83.0	15 7.5	24 12.0	28 14.0	73 36.5
C	176	27 15.3	53 30.1	35 19.9	120 68.2	9 5.1	15 8.5	30 17.0	57 32.4

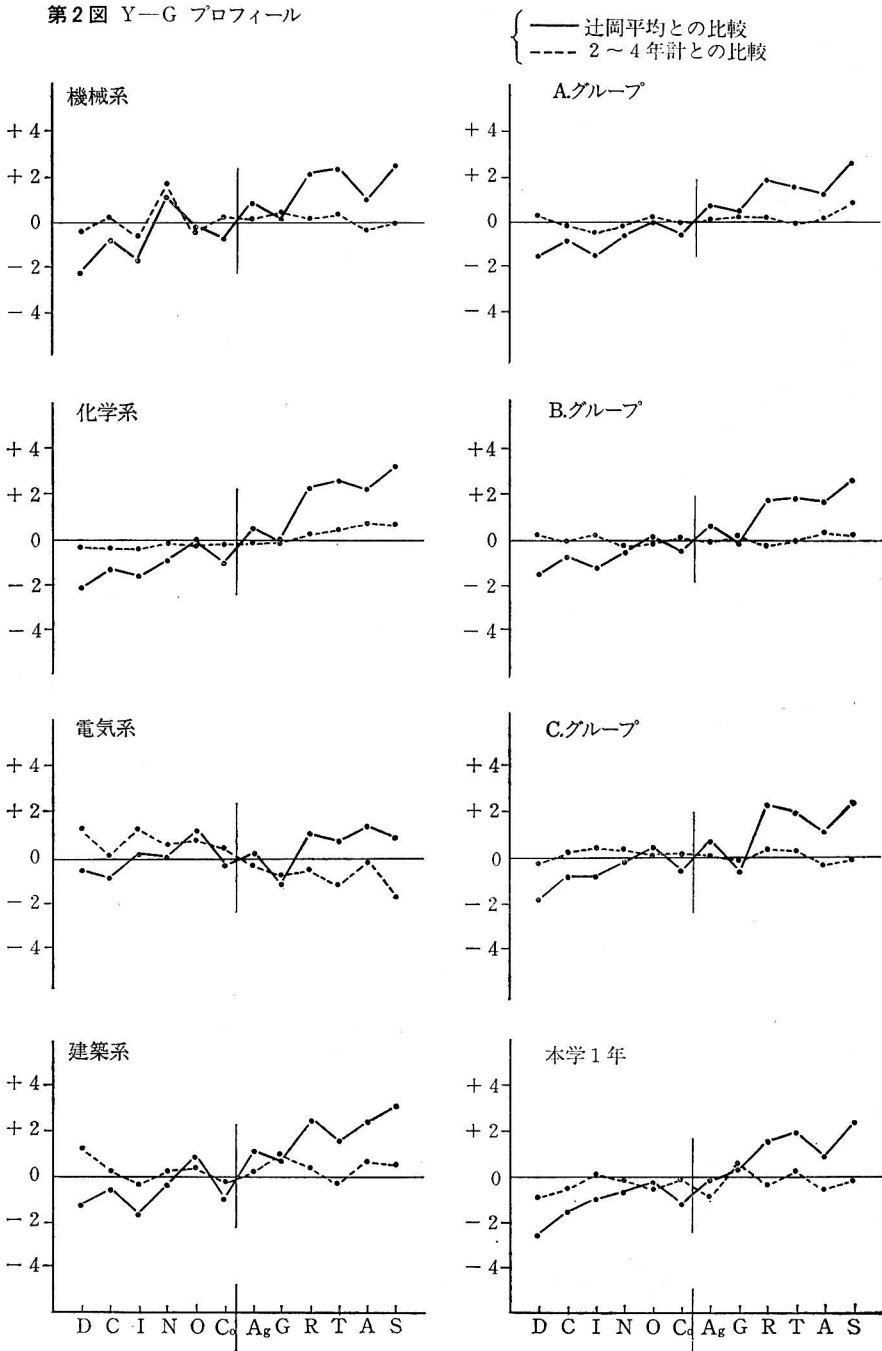
第十表 K 大学 D, E タイプ出現率

	D 型 タイプ				E 型 タイプ			
	l l r	l l r l c r	l l -	I 群	r r l	r r l r c l	r r -	Ⅲ群
機 械 科 N=50	7 14.0	8 16.0	13 26.0	34 68.0	3 6.0	6 12.0	7 14.0	19 38.0
化 学 科 N=50	10 20.0	14 28.0	16 32.0	43 86.0	7 14.0	8 16.0	17 34.0	35 70.0
電 気 科 N=50	6 12.0	10 20.0	14 28.0	34 68.0	3 6.0	7 14.0	11 22.0	22 44.0
土 木 科 N=50	11 22.0	16 32.0	11 22.0	43 86.0	2 4.0	2 4.0	8 16.0	13 26.0

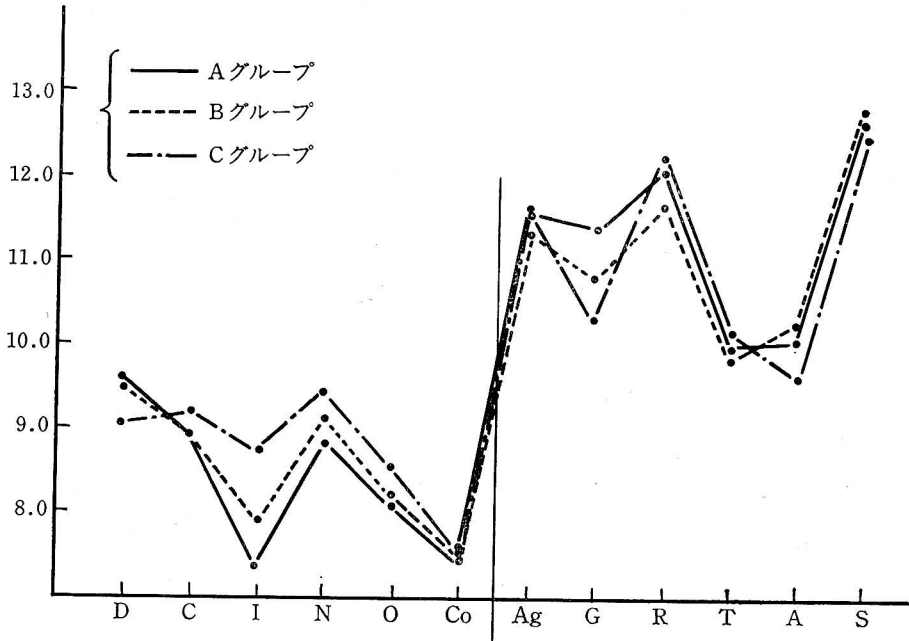
第1図 Y-G反応の比較
(矢印はD型寄りの方向を示す)



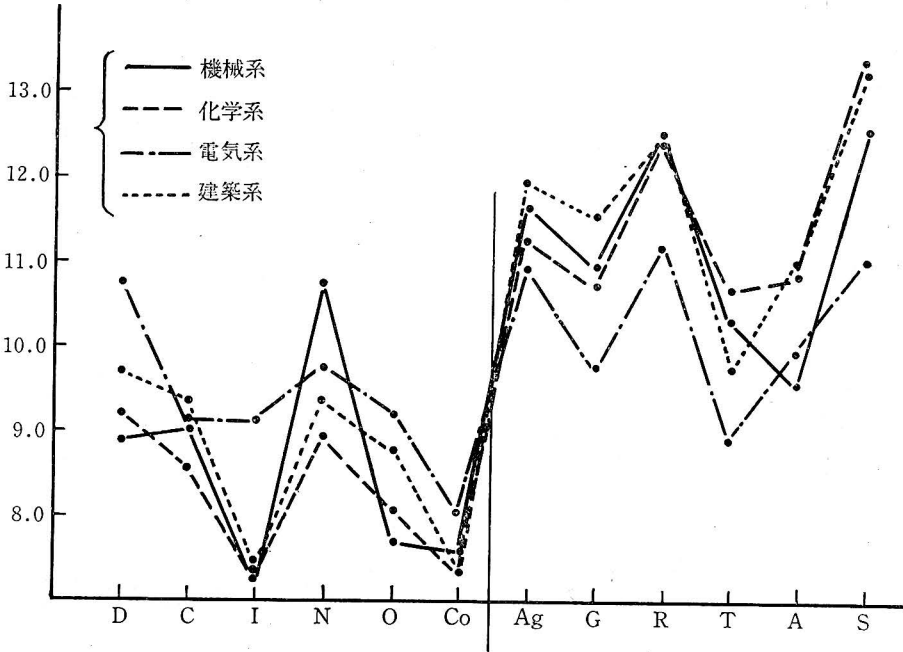
第2図 Y-G プロフィール



第3図 年度グループ別プロフィール



第4図 学系別プロフィール



工科系大学生の性格に関する研究（第二報）

第十一表 Y-G 上下各 6 尺度の差

	A	B	C	合計	機械系	化学系	電気系	建築系	本学1年	辻岡
尺度上下差	17.32	15.36	13.65	15.41	15.76	19.72	5.74	18.20	16.32	2.24
同 平 均	2.89	2.56	2.28	2.57	2.63	3.29	0.96	3.03	2.72	0.37

第十二表 Y-G 尺度・因子グループ別得点の平均

	A	B	C	合計	機械系	化学系	電気系	建築系	本学1年	辻岡
D・C・I・N	8.69	8.88	9.09	8.89	8.99	8.50	9.70	8.93	8.50	9.98
O・Co・Ag	9.05	9.03	9.23	9.10	8.97	8.90	9.38	9.33	9.57	9.11
Ag・G	11.47	11.06	10.92	11.12	11.29	11.01	10.35	11.75	10.87	10.86
G・R	11.71	11.23	11.23	11.36	11.47	11.56	10.44	12.02	11.40	10.41
R・T	11.00	10.80	11.16	10.97	11.14	11.51	10.05	11.12	10.90	9.06
A・S	11.35	11.45	10.99	11.27	11.07	12.05	10.45	12.11	10.94	9.38

参 考 文 献

- 1) 鎌田英爾「工科系大学生の性格に関する研究（保健体育理論再履習者の性格）」工学院大学研究論叢第27号，1989年，p. 127～144
- 2) 辻岡美延「新性格検査法」（Y-G 性格検査実施・応用・研究手引）日本心理テスト研究所 1982年
- 3) 鎌田英爾「性格と身体活動への興味に関する研究（本学学生について）」工学院大学研究論叢第18号1980年，p. 33～76
- 4) 前掲 1) p. 128
- 5) 前掲 1) p. 139
- 6) 前掲 3) p. 34
- 7) 山田久喜「矢田部・ギルフォード性格検査による 1・2 部学生の性格特性の比較(1)」近畿大学職業科学研究紀要 No. 3, 1962年，p. 37～44
- 8) 森脇 勤「Yatabe-Guilford 性格検査による 27 類型出現傾向より見た 本学一般学生及び運動部選手の性格 Pattern について」大阪体育学研究 No. 2, 1964年，p. 54～62
- 9) 山田久喜「理工学部学生に課した矢田部ギルフォード性格検査の結果について(3)」近畿大学芸文第5巻1号，1964年，p. 1～19
- 10) 鎌田英爾「工学院大学新入生の Yatabe-Guildford 性格検査法による 性格」工学院大学研究論叢第6号，1967年，p. 83～120

（かまた えいじ 本学教授 保健体育科）